

ジェンダーフリースペース通信 5号

GENDER FREE PRESS

〒195-8585

東京都町田市金井町2160

和光大学G112(G棟1階)

044-989-7777 内線4112

www.wako.ac.jp/gender/

去る十一月二十四日に、学生による企画として辛淑玉さんをお迎えしての講演会を行いました。靴のサイズから人質事件まで内容は多岐に渡り、質疑応答も含め参加者の熱気に包まれました。(講演の詳細については、ホームページイベント欄にて掲載の予定です)

辛淑玉ノンストップ辛口トーク！開催



話に引き込まれて真剣な表情の会場

私は、今回の講演会に実行委員として関わりました。大学でイベントを行うのはもちろん初めてのことだったので、勝手がわからずに戸惑うことも多かったのですが、何よりも辛淑玉さんの言葉を多くの和光の学生に聞いて欲しいという思いで、多くの人に支えられながら最後まで頑張ることができました。

講演の内容は、人権と差別をテーマに、女性問題からイラク戦争、そして和光大学の入学拒否問題までとても幅広くて深く考えさせられるものでした。辛さんは多くの怒りはとても愛のある怒りであつたように感じました。

講演会が終わり一ヶ月以上が過ぎた今も、これらの問題は続いています。それをどう捉え、どう行動していくのか。自分の中でそれを考える一つの大きなきっかけとなったのではないかと思います。

長南千鶴 (人間関係学科1年)

— 参加者の感想 (抜粋) —

■ 情報化社会の中で真実を見つけるのは自分の目しかないというのを気づかされました。今までの自分すらもう一度見直していかねければいけないとさえ思っていました。とても勉強になりました。

(3年男子)

■ 自分の知らないところで様々な「人」が様々な「差別」を受けているのだと分かり、自分が何も分かっていないことを思い知らされた。

(3年女子)

■ 辛さんの気迫に涙が出ました。怖くてこぼしたのではありません。やさしさを感じたからです。

(3年男子)

■ 一人の人間としてどうするか？自分はどう考えているのか？を確認できたような貴重な時間でした。

(4年女子)

■ 男女間のジェンダーの話でも男は強く働いてたかえ、女は男の視野の中にいるというか、差別があるが、それが当たり前のようない時代が変わらない気がする。変わらないからそのままに流されるのではなく、それに対して、自分はどうすべきなのか、このままで本当にいいのかなどと、自分で考えて自己発言できる人間になりたいと思いました。

(3年男子)

学生企画『第七官界彷徨―尾崎翠を探して』

上映会&監督来場トークセッション

この企画は「女性監督による女性作家のジェンダー的な見直し作品として、是非多くの人に見てほしい!」という学生の希望で実現しました。当日上映会の前後に講演をしてくださった監督の浜野佐知さんのお話によると、

□女性監督の存在とは?

それまでの映画業界には女性の募集はなく、学ぶ場(手段)さえなかったが、厳しい状況ながらも確実に女性の進出は起こっています。

□お気に入り(こだわり)のシーンは?

一番は最後の空中から撮った砂丘のシーンです。資金繰りが厳しく、最後の最後まで粘って何とか撮った甲斐がある

と思います。

□この映画の制作秘話?

制作費を集めるのが一番大変です。

この作品ではたくさんの女性団体や活動に携わる人との連帯、協力を助けられました。

□なぜ自主制作なのか?

集客数ではなく内容にこだわりたいからです。次回作は『百合子、ダスヴィダーニヤ 湯浅芳子の青春』を予定しています。

次回作原作者の沢部ひとみさんも駆けつけてくださり、お二人のパワーフルなお話に盛り上がりました! !

*浜野監督作品をジェンダーフリースペースでもご覧になります。



浜野監督(左)と次回原作者の沢部さん(右)

去る十二月三日に開かれた『第七官界彷徨―尾崎翠を探して』上映会に参加した。制作者である浜野佐知監督とのトークセッションも上映の前後に設けられており、脚本の山崎邦紀さんも巻き込み(?)、作品の解説はもちろんのこと、制作秘話、映像や構成、音楽などの専門技術、映画界における女性の地位、はたまた北野武監督の教授就任に至るまで、男性視点の多く残る映画界をサブテーマに、活発な意見交換がなされた。

私自身映画制作に関する専門的な知識は全くないのだが、その中でひとつだけ気になっていることがある。それは、役者の役作り、もしくは役者監督間の意思疎通に関することだ。役者の役作りはよく聞く話だが、たとえば『第七官界彷徨―尾崎翠を探して』に出演した役者たちは、「人間や社会や宇宙をもっと大きなところから見つめる」感覚を持っていた尾崎翠や、その尾崎翠が描いた『第七官界彷徨』の登場人物をどう理解していたのだろうか。役作りが最終的に一個人の経験・思想・想像力に因るならば、想像力を働かせても尾崎翠の感覚を吸収できないとき、それは演技に影響を与えるのではないだろうか。男性視点ではない映画制作もまた同じである。浜野監督の「これに出演している女性の役者は、いわゆる「美人」と言われている人たちではない」という言葉が印象に残っているが、なぜ「美人」でないのかを理解できるか否かは決して些細なことではないように思う。

映画が作られていく仕組みは別として、浜野監督は『第七官界彷徨』『尾崎翠』を役者にどう伝えたのか、役者はそれをどう捉え、どう表現したのだろうか。『第七官界彷徨』『尾崎翠』というイメージ性の強い作品・人物だからこそ、あの時間いておけばよかったなという思いは残るが、内容の濃い非常に充実した時間を過ごすことができ、よかったと思う。

上映会&トークセッションの感想として 実川いづみ

Girl Meets Boy Meets Girl

―戦後占領期の少女雑誌に見る少年少女の交際―

キャサリン・ユーナ・ベイ

アメリカ風の民主主義と平和主義を基に、新しい男女関係への期待がみなぎっていた占領末期の一九五一年―一九五二年。この時期の少女雑誌「少女の友」を資料として取り上げ、「少女」とその変化についてまとめました。

まず記事の中で特徴的なのは、理想の少年少女交際についての数回にわたる座談会特集です。その中で教育者や父兄による大人たちの理想は学校生活の延長としてのグループ交際なのに対して、少年少女たちの理想は男女対等な一対一の交際でした。少女たちは個人間に意味を成す、つまり新しい民主主義社会の行為者として存在していました。

また、そのことは当時人気の企画であった、少女読者自身の投稿による懸賞小説の中にも見ることが出来ます。少女の登場人物は感情と物語の原動力を与えていて、少女は強く活動的に少年を傷つきやすく繊細に描写することで、誰も恋愛関係にないにもかかわらず強い意義のある絆を築いています。そこには少女同士のような完全に等しい男女の友情が存在します。

一方、思春期以上の社会生活の中では今だ結婚や母性が女性の社会的自己の中心になる状況で、これらは矛盾した影響を与えました。社会的に経験される現実としての民主化の中、少女の書き手／読み手は彼女たちが個人レベルで新しい民主化の言説の重要性や含意を表す独特の位置にいたことを示しています。

*十一月十七日に行われた研究発表会の内容です。



慣れない日本語でスピーチしてくれたキャサリンさん

~~~~~



尾崎 翠（一八九六―一九七二）

鳥取県生まれの女性作家。代表作に「第七官界彷徨」「こほろぎ嬢」「歩行」など。

『第七官界彷徨』尾崎翠を採して」という映画は、ジェンダーの視点から代表作と尾崎の人生を捉えなおしている。ここでの「第七官界」とは、尾崎翠の考える第六感を超えた感覚世界のこと。



少女の友（一九〇八―一九五五）

実業の日本社発行。「少年」から切り離され「少女」と総称する少女専用雑誌として創刊。人気作家や画家が多数掲載され、長く愛読される。

## 海外情報

### 聖母のヘソ出し

植村 洋

八月になって久しぶりにロンドンへ出かけた。滞在中はよく街をぶらついた。それがロンドンにきた目的の一つだったから。驚くほど目についたのは「ヘソ出しルック」。細身、脂肪過多、色白、色黒など、人それぞれだといえ、多くの若い（ときにはそうでもない）女性がそのパフォーマーで、その流行りようは半端ではなかった。

へそと言えばマドンナ。マドンナのヘソは（誰のヘソでも）色っぽくも美しくもない（でしょ？）。それどころかそれはアンチ・マドンナの嫌悪感すら引き起こした。だがマドンナにとつては、「われ美と思う故にわが美あり」なのだ。「男根ロゴス中心主義」がコード化した女性美は関心の外、というより脱構築の対象でしかない。

今夏はマドンナをよく聴いた。彼女の歌には目新しい女も昔ながらの女もごろごろ存在する。ロマンスよりもカネが大事と言う女。エロスに男は不要だよとほめかす女。男への服従的な愛に満足する女。「ライク・ア・ヴァージン」では性に放縦な女が聖母マリアの似姿で登場する、などなど。マドンナはこうした「悪キヤラ」をブリッ子声で歌うものだから、アンチ・マドンナ派の神経をよけいに逆なでし、浪面や罵詈雑言をあちこちに誘発した。

こんな受難はしかし、マドンナには戦略の一環として織りこみずみだったに違いない。意表をついた「ヘソ出し」や挑発的な「悪キヤラ」はどれも彼女が構築した女らしさの記号なのだ。それに煽られて大騒ぎしているうちに、われわれの意識は自分のこれまでの性差意識への脅威をとくに感じないで、マルチ・ジェンダーの意味感覚に忍びよられ、差しこまれ、浸蝕されていき、やがて女らしさの固定観念を薄められ解かれていく。とすればそのとき、マドンナの戦略は功を奏して（とくに男には）恐ろしいことになるだろう。女の記号の書き直し、それによる文化の再コード化（と言ったら大袈裟だろうか）への道がそのときこそ拓かれることになるのだ。ヴァージンとうそぶくあの女の子みたいに、ブリッ子声で悪戯っぽく舌をペロっと出して歌うマドンナが目に見えよう。

うえむらよう（世話人・表現文化学科）

### 本棚から

#### 『私と中国とフェミニズム』

秋山洋子著 インパクト出版 2004年



はじめ、なんてストレートなタイトルだろうと思った。中国文学、研究でも常に発言を続けてきた著者の最新刊が『私と中国とフェミニズム』だ。六〇年代という激動の時代に、学生時代を過ごし、中国に出会い、

リブに出会い、自分の生きている地点を見つめながら、それにとどまることなく中国やアジアといった世界にその視点、分析を広げていく。古いものは八〇年代に書かれたものもあるが、この間に書きためた小論やエッセイ、映画評などをまとめたものだ。時系列には並んでいないが、はじめにとあとがきで、それぞれ書かれた時代背景が述べられている。著者らしいなと思うのは、必ず自身の実生活上の変遷（歴史）がともに書き添えられていることだ。自分から出発すればいいとは著者の弁。フェミニズム分析にしても、当時、そして今の中国や旧ソ連など社会主義圏への分析にしても、論理展開や表現はわかりやすい。思い入れも伝わってくる。正に、「私と中国とフェミニズム」なのだ。

（富岡千尋・和光大学大学院1年）

\*ジェンダーフリースペースでも扱っています。

・展示企画「モノに見る女／男」

【五月十六日～二十日】大学図書館梅根記念室にて毎年恒例となった展示ですが、今回は「おもちゃ」をテーマに企画します。

・学生企画を募集中

興味ある・やってみみたい企画の持込を待っています。所定用紙があるのでお問い合わせ下さい。

\*この他にもメディア&トークや講演会など計画中です。大学内掲示や配布物、ホームページをチェックして、是非ご参加ください。